企業名：　タキロンシーアイ株式会社

レポート名：　統合報告書 2022

1. この会社が目指している将来の姿が理解できるか

中期経営計画「変革への決意 CX2023 （Commit to Transformation 2023）」や、事業セグメント別に将来の目標が示されていることから、タキロンシーアイが目指している将来の姿はよく理解することができた。また、2030 年のあるべき姿として、統合報告書内の見出しにもあるようにタキロンシーアイは事業を通じて社会課題解決に貢献することで、企業としての持続可能な成長と企業価値の向上を目指し、サステナビリティと経営を一体化して、全ての企業活動 に ESG（環境・社会・ガバナンス）の観点を反映する「サステナビリティ経営」を軸としている。現在の会社のあり方は自社や株主に還元するために利益を追求するだけでなく、SDGs をはじめとして環境への配慮や社会課題の解決ということが重視されているため、サステナビリティ経営を軸とすることは適切であると感じた。さらにサステナビリティ経営において具体的に二つの基本設計が示してあり、将来の姿をより深く理解することができた。この基本設計では、社会解決型の事業を推進し、様々なサステナビリティの課題に取り組むことで社会環境の変化に対応することと、ステークホルダーへの開示と対話をしていく方針が示されている。課題に対する取り組み方法と、情報開示やステークホルダーの意見を取り入れることが示されており、将来の姿に対しての納得もすることができた。この基本設計の内容についても具体的に述べられており、体制に関して、「サステナビリティ委員会」が 2022 年に設置されたことや、コミュニケーションに関して、2022 年度後半に「サステナビリティ行動宣言」を導入することが明言されており、将来の姿がより具体的に理解できた。目標を述べるだけでなく、その目標に向けて現在取り組んで切ることや、今後行うことが確定していることを明示することによって、目標達成が現実なものであると感じることができた。

このことに加えて、タキロンシーアイはサステナビリティ経営において優先的に取り組むべきマテリアリティを 2019 年に定めた。その中の一つである環境負荷の低減について述べる。この項目において特にカーボンニュートラルへの挑戦を掲げている。タキロンシーアイは 2050 年にカーボンニュートラル（実質排出量 0）を目指し、その中間目標を 2030 年度に排出する温暖化ガスについて 35%削減（2018 年度比）とサプライチェーン全体での削減に取り組むこととしている。2021 年度において 20%削減（2018 年度比）を達成しており、現実的な目標だと考えられる。2050 年の目標を示すことで長期的な将来に関しての像を大まかに理解し、中間目標によって具体性をもたせることで目標とする像の理解度が上がったと感じた。

以上より、タキロンシーアイは長期的な目標や大きな軸を示し、それに対する中間目標や

現在進行しているものも含めて具体的な取り組みの内容が示されており、目標としている将来の像を理解することはできたと考える。

2. この会社の現在の競争優位性が理解できるか

各事業セグメント別に強みが述べられており、競争優位性の理解につながった。各業界において高いシェアを持つ製品を作れていることが強みであり、B to B の会社であるためそれらの製品を私たちは頻繁に目にするわけではないが、実際の製品の例なども用いて説明されており、理解しやすかった。特に環境資材事業に関して、社会インフラの機能や安全性を支える資材を提供しており、その業界でトップクラスのシェアを持っていることは競合優位性が高いと感じた。社会インフラを整えることに直接関与する製品を扱っていれば、不況時でも政府の公共事業に関与でき、安定性が高いと考えた。さらに、機能フィルム事業におけるサンジップ事業では医薬分野でも使用されておりコロナ禍での需要が拡大していると述べられている。タキロンシーアイは一つの事業や一つの業界にのみ精通するのではなく、農業や建築、医療や半導体など幅広く様々な事業におけるシェアが高いことが最大の競争優位性だと感じた。ある業界が不況に陥ったとしてもほかの事業において賄うことができ安定していると考えた。一方で、事業セグメント別にわかれているため、全体としての競合優位性がすぐにはわかりにくかった。また、製品自体もなじみがないものであるため、シェアに関しても実際の数値などを用いて説明してあるとより理解が深くなると感じた。以上のことから、資料を読み込んだ際に競合優位性の理解は非常にしやすかった。ただ、会社全体としての強みを事業セグメント別の説明をする前に述べられているとさらに深い理解につながるのではないかと考えた。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

前項で述べた競争優位性に関してその特性や、統合報告書に書いてある内容をふまえると、持続性はあると考えた。タキロンシーアイはサステナビリティ経営を軸としており中期経営計画の重点実施項目の中にも社会問題の解決が挙げられている。また、各事業セグメントにおいても、事業を通じた社会価値創出という見出しにおいて、環境への配慮や社会的貢献できることについて述べられている。現在の会社には環境への配慮や社会問題の解決が求められているため、現在の競争優位性を維持したままサステナビリティの取り組みを活性化することができたら、持続することができると考えた。また、業界における高いシェアに関しては、短期間で他社に追い越されるということは少なく、持続性は高いと考える。さらに、CX2023 で目指す姿という項目において、2030 年でのあり方を見ると、業界のシェアの利用や、欧州の拠点を軸に海外展開を目指すなど、この競合優位性の持続を前提としてさらにシェアを獲得していこうという姿勢がみられる。複数の業界においてシェアが高く、社会インフラにも携わっているため、様々な観点において事業を進めることができる。そのため業界トップクラスのシェアは維持できると予想できる。以上のことから前の項で述べ

た競合優位性は持続性が高いと考える。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

人材戦略の項目を読んで、私は英語、多様性、サステナビリティの知識を育成することができると感じた。

英語について、タキロンシーアイでは語学教育という形で海外留学や国内教育などを行っている。ほかにも TOEIC 対策コースや、英語力強化研修なども行っていることがわかる。積極的にこういった研修に参加していくと、自分で勉強することはもちろん必要であるが、英語力は伸びると考えた。加えて、タキロンシーアイは海外にも経典を置いて、中期目標として海外進出を加速させようとしている。そのため今後英語力の育成にはさらに力が入ることが予想され、実用的な英語力の取得につながると考えた。

多様性について、タキロンシーアイでは「ダイバーシティ＆インクルージョン」の考えを社員一人ひとりが理解できるように社会教育を実施している。また、性別や年齢、障がいにとらわれない採用や人材育成をしており、自分とは環境や考え方の異なる人とのかかわりが多く、そのことを通じて、他社への理解や受け入れがより広くなるのではないかと考えた。

サステナビリティについて、先述の通りタキロンシーアイはサステナビリティ経営を軸として経営戦略を考えている。そのため、若手社員にもモリウミアス研修において廃坑を利用したサスティナブルな研修施設を利用して、五感を使って実際に自然と触れ合いながら循環型社会や地域貢献のあり方について考えることができる。この研修では社員同士の話し合いの時間も多くほかの人の意見も聞きながら、自分の考えを深めることができる。環境への配慮や社会課題の解決が重視される今の時代にとってサステナビリティに関して深くかかわり考えを深めることは自身の人的資本の価値を向上してくれると感じた。

タキロンシーアイは「充実宣言　経営宣言」重点施策を中心に制度の制定や活用の促進に取り組んでいる。そのため、先述した人的資本の価値を向上できることについて、持続することができると感じた。いくら教育を受ける機会があっても、短期的に終わってしまったら身につかない。そのため従業員に好ましい会社づくりがなされていて、人的資本の価値を向上させることは身につけることまで可能になると考えた。一方で、英語教育や、専門能力教育を実施しているとあるが、期間や規模、具体的な内容までは記載されていなかった。そのため内容に関して具体的なことが書いてあると、より自身の人的資本の育成につながることが理解しやすいと感じた。

以上のことから、研修が充実しており自身の人的資本の価値を向上させることはできると感じたが、書かれている内容があいまいなものもあるため、向上できるであろう幅は想像しにくいと考えた。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

非財務についての成果がまとめられていること、事業における懸念点を示していること、

サステナビリティ経営を軸とした一貫性があることが良い点だと考えた。一方で、具体的内容が示されていないことと人材育成において女性にばかり重きを置いていることに対して改善の余地があると感じた。

財務・非財務ハイライトという見出しにおいて、非財務について達成していることがまとめてあり、一目見て理解できる点は良いと考えた。実際の数値を用いて、昨年との比較もしてあり、一年間での変化も加味することができるのでわかりやすい。また、各事業セグメントにおける説明のところで、強みだけでなく懸念点まで示されているため、会社が自身の弱い点を理解していることが伝わり、投資家にとって抱えるべきリスクも理解することができるため、目に見えない不安が少ないと考えた。環境汚染が問題視されている中、タキロンシーアイはプラスチックを扱う事業が多い中で非難の対象となりやすいと感じたが、サステナビリティに力を入れ、リサイクルできるプラスチックを企画立案することが示されており、懸念点に対する対策がしっかりされていると感じた。サステナビリティ経営を軸として運営をしていることについて、事業ごとの説明や中期経営計画、人材育成についてもこの考えが基本となっており、首尾一貫した内容となっていて、内容が理解しやすいことはもちろん、示してある内容について信頼できると考えた。

一方で、前項で述べたように内容の具体性が乏しいと感じた。6つの重要実施項目についてもカーボンニュートラルに関しては、長期目標と中期目標が示されており、それに向けた対策なども細かく述べられていたがほかの項目についてはもう少し具体的に目標に対しての現在、今後の取り組みが示されていると深い理解につながると考えた。また、人材育成について、女性の社会進出を助け、そのための制度が充実していることは伝わったが、従業員全体としての制度や教育について言及してほしいと感じた。監査役や取締役のインタビューにおいても全員が女性の活躍を重視した内容になっていた。もちろん女性の社会進出は現在注目されていて大事だとは思うが、従業員全体に対してどのような制度が充実してあるかが述べられていると入社した後の姿が想像しやすいと感じた。

全体として軸がしっかりとあり、内容に関しても読みやすく理解しやすく書かれていると感じた。改善点を述べたがタキロンシーアイが重視していることは伝わっており、充実した内容であったと考えた。